

也と見ゆ、万葉集に庭多泉と書り、流るゝの枕詞也、仙覺抄に立水居水の事見えたり、立水は泉也といへり、喜撰式に庭水にはたつみと見え、吳竹集に庭のたつみともよめり、南伊勢の俗は淵をたづみといふ、

〔古事記仁德〕故是口子臣、自此御歌之時大雨爾不避其雨、參伏前殿戶者、違出後戶、參伏後殿戶者、違出前戶、爾匍匐進赴、跪于庭中時、水潦至腰、其臣服著紅紐青摺衣、故水潦拂紅紐青皆變紅色、

〔古事記傳三十六〕水潦は、○中雨降時に地上にたまりて流るゝ水なり、師賀茂真淵の俄泉の意なりと云れたるは、あた

〔日本書紀二十四〕四年六月戊申、是日雨下、潦水溢庭、

〔萬葉集二〕挽歌皇子尊宮舍人等、慟傷作歌二十三首○中
御立爲之、島乎見時、庭多泉流、涙止曾金鶴、

〔萬葉集七〕譬喩歌寄雨
甚多毛、不零雨故、庭立水、太莫逝、人之應知、

〔古今和歌六帖三〕にはたづみ

世の中はありてむなしきにはたづみおのがゆきく、別れぬる身を

〔藏玉和詞集夏〕庭堪草、これは五月雨の頃の庭にたまる泉なり

五月雨やはれず降らん、庭堪草行かたもなき花のゆふぐれ、

〔倭名類聚抄雲一〕沫雨、淮南子註云、沫雨、雨潦上沫起若覆盆、和名宇太加太

〔類聚名義抄水五〕沫雨、ウタカタ

〔倭訓栞前編四〕うたかた、遊仙窟に未必をよめり、虚象の意にや、古來の説に、寧の意といひ、まば

しの義、すこしの義などもいへり、又危くかりをよめなる意、定めなくはかなき意などにも取てよ

沫雨